

「過去を忘れる者は、それを繰り返す運命にある」

ホロコーストの灰から生まれた「二度と繰り返さない」という約束は、国際人権法と世界の道徳的意識の礎となってきた。しかし、このエッセイのタイトルとなったジョージ・サンタヤナの引用が警告するように、過去の残虐行為と現在の危機の類似点は、ジェノサイドを煽るイデオロギーと、それが可能となるシステムの失敗の両方における、憂慮すべき連續性を明らかにしている。このエッセイでは、3つの章を通じてこれらの類似性を探る：まず、ホロコーストにおける優越性と非人間化の役割、および国際連盟や常設国際司法裁判所（PCIJ）などの国際機関がそれを防ぐ、または止めることに失敗したこと；次に、イスラエルがアラブ人、特にパレスチナ人に対して抱く態度と、ガザでのその行動における驚くべき類似性；最後に、ガザでのジェノサイドを確立する、**犯罪の意図**（mens rea）と**犯罪行為**（actus reus）の説得力のある証拠が、「二度と繰り返さない」約束、ジェノサイド条約、そして「保護する責任」（R2P）原則の下で、国家や当局者が行動する道徳的・法的義務を強調している。

優越性、非人間化、国際機関の失敗

ホロコーストは、歴史上最も体系的なジェノサイドの一つであり、600万人のユダヤ人とその他数百万人の絶滅を正当化した、人種的優越性と非人間化のイデオロギーに支えられていた。アーリア至上主義の概念に根ざしたナチスのイデオロギーは、ユダヤ人をドイツ国家に対する非人間的な脅威として位置づけた。プロパガンダはユダヤ人を「害虫」「寄生虫」「人種的敵」と描写し、彼らの人間性を剥奪し、体系的な破壊を容易にした。この非人間化は自然発生的な行為ではなく、ヒトラーの演説やゲッベルスのプロパガンダに見られるように、ユダヤ人をドイツの存続のために排除すべき実存的脅威として枠組み立てる意図的な戦略だった。

ナチス政権はユダヤ人をワルシャワなどのゲットーに集中させ、そこで飢餓と病気により数万人が死亡し、その後、アウシュビツなどの絶滅収容所へ移送され、ガス室による工業的殺戮が行われた。ユダヤ人を集団として破壊する意図は「最終解決策」に明確に示されており、ジェノサイドの**犯罪の意図**を満たし、殺害、重大な危害の加害、致命的条件の強制、去勢による出生阻止、150万人の子供の殺害といった行為は、後に定義された国連ジェノサイド条約（1948年）の下での**犯罪行為**を満たした。

国際機関、特に国際連盟とPCIJは、構造的弱点と地政学的現実により、このジェノサイドを防ぐことも止めることもできなかった。1920年に平和維持のために設立された国際連盟は、執行メカニズムを欠き、満場一致の決定に依存していたため、フランスやイギリスなどの大国はナチス・ドイツの宥和政策を介入よりも優先した。国際連盟が支援したエビアン会議（1938年）は、ユダヤ人難民危機に対応できず、ほとんどの国が難民の受け入れを拒否したため、ナチスの残虐行為を助長した。国際連盟の司法機関であるPCIJは、国家間の紛争を解決すること

はできたが、ホロコーストのような内部の残虐行為に対処する権限や力を持たず、当時の主権が人権よりも優先された時代を反映していた。ホロコーストの全貌が明らかになった時には、国際連盟はすでに機能しておらず、世界は戦争状態にあり、脆弱な集団を保護する国際メカニズムの壊滅的な失敗を浮き彫りにした。

イスラエルがアラブ人に対する態度とガザでの行動の類似性

イスラエルがアラブ人、特にパレスチナ人に対して抱く態度と、ガザでのその行動は、優越性、非人間化、体系的暴力のイデオロギーに根ざした、ホロコーストとの背筋が凍るような類似性を明らかにしている。イスラエル指導者の歴史的発言は、パレスチナ人を排除または破壊する長期的な意図を示している。ヨセフ・ワイツ（1940年代）は「アラブ人のいないイスラエルの土地」を求め、すべてのパレスチナ人の「移送」を主張し、「一つの村、一つの部族も残さない」と述べた。メナヘム・ベギン（1982年）は、ユダヤ人を「支配人種」と主張し、他の人種を「獣や動物、せいぜい家畜」と呼び、ナチスのアーリア至上主義を彷彿とさせた。ラファエル・エイタン（1983年）は、土地が殖民された後、パレスチナ人を「ボトルの中の麻薬漬けのゴキブリ」と想像し、ナチスのプロパガンダと同様に彼らを非人間化した。最近では、2023年のエルサレム旗行進で数千人が「アラブ人に死を」「お前の村が燃えますように」と叫び、2024年の入植者会議では「ガザに定住する」計画が立てられ、「ハマスなし」——暗黙的にパレスチナ人なしの未来を想像していた。さらに、遺産相アミハイ・エリアフは2023年11月に、ハマスとの戦争におけるイスラエルの選択肢の一つとして「ガザ地区に核爆弾を投下すること」を挙げ、首相ベンヤミン・ネタニヤフによって否定されたこの発言は、ソーシャルメディアや他の場所でガザの完全破壊を求める多くの呼びかけに反映された、極端な殲滅のレトリックを示している。

これらの態度は、ガザでの行動に変換され、ナチスの戦術を反映している。2007年以来封鎖下にある365平方キロメートルに210万人が閉じ込められたガザは、ナチスのゲットーに似ており、今や「大規模な絶滅収容所」と形容できるものに変貌している。2023年10月以降、イスラエルのキャンペーンは爆撃により4万人以上のパレスチナ人を殺害し、その中には1万5千人の子供が含まれている（ガザ保健当局、2024年末）。イスラエル・カツ（「ガザに人道援助は入らない」とベザレル・スマトリッヂ（「小麦一粒もない」）によって確認された、2か月にわたる完全な包囲（2025年5月時点）は、110万人が飢餓の危機に瀕し、子供たちが栄養失調で死亡する飢饉を引き起こした（国連報告、2024年）。インフラの破壊——住宅の70%、ほとんどの病院——は居住不可能な条件を生み出し、白リン使用は先天性奇形と関連している（ヒューマン・ライツ・ウォッチ、2023年）。「ゲットー」と形容されるチェックポイントと入植地のあるヨルダン川西岸では、2023年に83人の子供が殺害され、前年の総数の2倍となり、軍事作戦の増加に伴っている（ユニセフ）。

2024年の『タイムズ・オブ・イスラエル』の記事が、イスラエルの人口増加（2040年までに1520万人）を収容するためにヨルダン川西岸に「レーベンスラウム（生存圏）」を求めたことは、ドイツ入植者のために空間を確保するためにジェノサイドを正当化したナチスの領土的野心と直接的に類似している。イスラエル当局者の発言、例えばヨアヴ・ガラントの「人間の動物」（2023年）や、イスラエル国防軍に「白旗を掲げない者をすべて殺す」ことを要求する議

会文書（2025年）は、パレスチナ人を無差別に非人間化し、攻撃し、ナチスがユダヤ人を標的にした政策と同様である。スマトリッヂが2023年11月に追加で述べた、イスラエルが戦後ガザを支配するというコメントは、パレスチナ人の存在を排除する長期計画を示唆し、入植者会議のビジョンやアラブ人のいない土地を求める歴史的呼びかけと一致している。ガザとヨルダン川西岸の事前隔離によって可能となったこの体系的暴力は、ホロコーストがゲットーと収容所を利用して隔離と破壊を行った方法を反映している。

ガザでのジェノサイドの証拠と世界的な行動の義務

ガザの証拠は、国連ジェノサイド条約とローマ規程の下で、ジェノサイドの**犯罪の意図と犯罪行為**の両方を確立し、国家と当局者に「二度と繰り返さない」約束、ジェノサイド条約、およびR2P原則に基づいて行動するよう強制している。

犯罪の意図：ガザのパレスチナ人を破壊する意図は、非人間化のレトリックと明確な政策のパターンに明らかである。歴史的発言（ワイツ、ベギン、エイタン）は排除の先例を設け、現代の発言は行動におけるこの意図を確認する：ガラントの「人間の動物」、スマトリッヂの「小麦一粒もない」、カツツの「人道援助なし」、旗行進の「アラブ人に死を」は、すべてパレスチナ人を破壊すべき集団として枠組み立てる。入植者会議の「ハマスなし」——暗黙的にパレスチナ人なしのガザの計画は、ソーシャルメディアや他の場所でのガザの完全殲滅を求める数多くの呼びかけと一致し、例えばエリアフの2023年の「ガザ地区に核爆弾を投下する」提案などである。スマトリッヂのイスラエルが戦後ガザを支配するという主張は、パレスチナ人の存在を完全に排除するビジョンをさらに示している。イスラエルが2024年の国際司法裁判所の措置に従わないこと——ジェノサイドを防ぐための援助アクセスを命じた措置——は、これらの行為を意図と結びつけ、致命的条件を悪化させる意図的な選択を示している。

犯罪行為：イスラエルの行動は複数のジェノサイド行為を満たす：（1）**殺害**：ガザで4万人、ヨルダン川西岸で83人の子供の死亡（2023年）；（2）**重大な危害**：爆撃、負傷、トラウマ、化学物質（白リン）への曝露；（3）**生活条件**：包囲、飢餓、インフラ破壊による居住不可能な条件；（4）**出生阻止**：栄養失調と化学物質による流産と生殖障害；（5）**子供の移送**：ガザで1万5千人の子供、ヨルダン川西岸で83人の子供の殺害（「墓への移送」）。旗行進の襲撃とヨルダン川西岸の暴力はこのパターンを補強し、全領土にわたる体系的キャンペーンを示している。

これらの証拠はジェノサイドの法的閾値に達しており、国際司法裁判所（2024年）はもっともらしいリスクを見出し、国際刑事裁判所は戦争犯罪として飢餓を戦争手段として使用したとしてネタニヤフとガラントに対する逮捕状を発行した。ホロコーストとの類似性——優越主義イデオロギー、非人間化、集中、体系的殺害——は危機の深刻さを強調している。エリアフの核爆弾に関するコメントは、否定されたとしても、スマトリッヂの戦後支配のビジョンとともに、完全な破壊を検討する意思を示唆する極端なレトリックを反映し、ジェノサイドの意図をさらに証明している。それでも、国際機関は再び失敗している：国連は米国の拒否権で麻痺し、国際司法裁判所の判決は執行できず、国際刑事裁判所の逮捕状は執行力を持たず、ホロコースト中の国際連盟の失敗を反映している。

ホロコーストの教訓から生まれた「二度と繰り返さない」約束、ジェノサイド条約（第1条は国家にジェノサイドの防止と処罰を義務付ける）、およびR2P原則（国家はジェノサイドから人口を保護し、失敗すれば国際的介入が必要）の下で、すべての国家と当局者は行動する道徳的・法的義務を負っている。これには、制裁の実施、イスラエルへの軍事援助の停止（例：2023年以降の米国の170億ドル）、国際刑事裁判所の逮捕状の執行、包囲と爆撃を終わらせるための人道的介入の支援が含まれる。行動しないことは国際連盟の過ちを繰り返し、人類をジェノサイドから守るという約束を裏切ることになる。

結論

ホロコーストとガザは、ジェノサイドを煽る優越性と非人間化のイデオロギーと、それが可能となる国際機関のシステム的失敗の悲劇的な連續性を明らかにしている。国連、国際司法裁判所、国際刑事裁判所は、大国政治と主権規範によって麻痺し、パレスチナ人を追放する意図と優越主義的レトリックの歴史に支えられたイスラエルのガザでの行動を止めることができない。**犯罪の意図と犯罪行為の証拠**は、エリアフの核殲滅の提案やスマトリッヂの戦後支配のビジョンといった極端な発言によってさらに固められ、合理的な疑いを超えてジェノサイドを確立している。「二度と繰り返さない」、ジェノサイド条約、R2P原則に基づく世界コミュニティの義務は、ガザの残虐行為を止めるための即時行動を要求し、歴史がその最も暗い章を繰り返さないようにする。「二度と繰り返さない」という約束は言葉以上のもの——正義、保護、人間性のための行動の呼びかけでなければならない。